



(マカルー頂上の大西隊員)

秀峰マカルーを目指して(下)

大西 宏

BC休養は長くとり、ブルーシートで屋根がけをしたカルカでシエルパと四六時中キテイトランプをしたり、間食をしたりなどしていると時のたつのを忘れる。原さんは居間で途中入山してきた中日新聞の石川記者と文学談議をしたり、付近を散策したりとBC生活を愉悅している様子であった。

シエルパと私だけで登っているようなもので、チームで一致団結するといふのはほど遠く不協和音が横溢し、ポーランド人とは反ばくしているといつた状況であったが、私の脳裏にはそれでも不断に「とにかく成否にかかわらず結果を出さなきゃ。」といった青白

い炎がかくされていた。一週間のBC休養を終えた五月二日待望のアタックへ向けBCを後にした。当初より風も息をするようになり、天候も変化が激しく好天の予兆もあった。とにかく、モンsoon前の好天の周期をとらえるのだ。アタックには原さん、シエルパ二名そして私という布陣である。「グッド・ラック。」というテンジンと握手をし、シエルパ三名と共に上部での隊荷を担いだ。マカルー・ラへの登高は吹雪の中のフィックス掘り起こしとテント設営に難渋したが、岩屑の陰にうまくテントを設営した。風の弱い箇所は猫のひたいほどしかない。その晩は睡眠酸素を吸い熟睡した。C4建設の日も朝からホワイトアウトで一人を下るサポーター要員のダワは二の足を踏んでいたが、我々には前進しか

「グッド・ラック。」というテンジンと握手をし、シエルパ三名と共に上部での隊荷を担いだ。マカルー・ラへの登高は吹雪の中のフィックス掘り起こしとテント設営に難渋したが、岩屑の陰にうまくテントを設営した。風の弱い箇所は猫のひたいほどしかない。その晩は睡眠酸素を吸い熟睡した。C4建設の日も朝からホワイトアウトで一人を下るサポーター要員のダワは二の足を踏んでいたが、我々には前進しか

登ったところに雪を削ってC4を設営した。アタック用の装備、光熱類、食糧を全て背負っての行動で一気になアタック態勢を確立した。サポーターのシエルパ一名はここから下っていった。時々刻々と天候は回復に向かい、チベットの山々が素晴らしい。チベットの乾ききった土堆とネパールの多雪の牙城とが奇妙に対照していた。大岩壁をしたがえた特異な風貌のチョモレンゾも指呼の位置だ。ニマ・ドルジェが一人ではしゃいでお茶を沸したりまめまめしく働いているが、原さんは冥想にふけっている感じ。六時に寝て朝の二時半に起床。ラーメンで口を糊した後、五時にテントを出る。無風快晴だ。五時から終日開局する予定になっているBCを高揚した気持ちで呼び出す。「絶好のチャンスなので頑張ります。」と……。昨日不屈にホワ



1990年(平成二年)

9月号(No. 543)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 秀峰マカルーを目指して(下).....大西 宏...(1)
- 第2回「海外登山基金」助成登山計画募集.....(2)
- 村木副会長の自然保護講演会.....(3)
- 海外の山「1990年—夏山事情」.....(4)
- アンナプルナ登頂 40周年に参加して.....日下田 実...(5)
- 追悼 元会員 小出博氏.....織内信彦...(5)
- 東西南北「ADRAの活動に参加して」「オーロラの下で、を見る」ほか.....(7)
- 図書紹介「片雲往来」「静岡大学西域学術登山隊報告書 1989」ほか.....(12)
- 自然保護随想.....(13)
- 報告「冬期マッキンリーの登山と気象遭難(1)」「北海道初夏山行」.....(15)
- 会務報告七月理事会、ルーム日誌、タンボチュエ僧院再建協力募金者ご芳名、住所・住居表示変更、新入会員(復活).....(16)
- 図書受入報告.....(17)
- お知らせ.....(18)

▶日本山岳会事務取扱時間  
月、火、木、土曜 10時~20時  
水、金曜 13時~20時  
日曜・祭日は休み  
▶図書室開室時間  
日曜・祭日・月曜を除く毎日  
13時~20時

なかつた。チャゴ氷河側の岩まじりのリッジにルートをとって、眼前の岩壁を避け氷河の段差上ブライから大斜面をトラバースし、岩と雪のミックステッドな緩傾斜のルンゼ状を少し

お知らせ電話番号

234 六六五九

イトアウトの中行動したので好機が到来したのだ。アタックルートは意外と長く、セラック帯を苦心して抜けると頂稜へかけ上っているクローアールまでは、左側に段差を持っている大斜面となる。クローアールの第一バンドは左の岩壁リッジから巻き、第一、第二バンド間急勾配に出る。第二バンドは悪相で、ニマがアンブーと原さんの

### 第二回「海外登山基金」助成

#### 登山計画募集 海外登山基金委員会

第一回目の事業は、既報のとおり、本年五月、四隊の申請が出され、二隊に対し助成が行われました。続いて第二目を左記のとおり募集します。ふるってご応募下さい。

一、対象 平成三年二月一日～平成四年一月末日に出発する登山隊

二、申請方法 所定の様式(山岳会事務局に請求のこ  
と)に記入し、登山計画書(十五部)を添付して申請

三、申請締切 平成二年十二月末日

ために第一バンド終了点からフィックスをたらしに行っている間に(結果的に直接第一バンドを登った方がよっぽど容易であった)私は正念場の第二バンドを、残置されている古いフィックスをゴボウ抜きにして突破した。そして真新しい九エバードライを終了点の不安定な岩棚から垂らす。原さんとアンブーはこの時点で第二バンド下(八三〇〇ft)から酸素の残量を考慮して、引き返しを決意した。

第二ロックバンド上は露岩まじりの斜面を喘ぎ登り、われらがニマ・ドルジェもついてきた。息せき切って登ると国境稜線にとび出し、尾根はしだいにやせる。雪庇も南東稜側にはり出している。正午を回りいかにも手強そうな頂上ピラミッド基部に着く。ここでBCと交信し、頂上まであと一投足であることを告げる。ニマは「もう原さん

る雪の付着した岩壁が俯瞰できた。最後に馬の背状の尾根を登ると一人がやっと立てるほどの頂上に立った。

頂上をはさみ、ニマ・ドルジェと写真を撮ったり、BCと交信したのちに下りにかかる。「頂上はエンピツの先みたいだったぜ!!」と言ったフランス隊初登頂の際の台詞が想起される。生の氾濫するアルン河沿いのプロログに始まり、無機質な頂上に登ってきた。

帰路はかなり疲労困憊し、ニマが天真らんまんに下ってしまった後、驚くほどの好天の中を数歩あるいては立ち止り、へたり込み、三時間半もの所要時間でファイナルキャンプに帰着する。この一夜は少し惨めであったがニマが待っていて「風邪をひいて寒い。」と羽毛にくるまっていた。茶を沸して飲んだだけで早々にシユラフに入った。

五月十三日にポーターを呼び、屈強なシエルパ族たち三十名が上ってきた。そして住みなれたBCを後にした。帰路もコンマ・ラ越えが山場で、日本の五月のような雪が氷化していたりしてカッティングが必要なほどになつており苦心したが、バルン谷の段丘上はラリガラスの群落が百花斉放し、樹林の包容力の中で私は戸惑った。そして、数日後にはアルンの奔流を清涼剤として受胎力のある自然の中を歩い

### ●東九州支部創立三十周年記念、 由布岳の集いのお知らせ

十一月三～四日湯布院ハイツゝ由布岳で行われます。参加希望者は東九州支部事務局へお問合せ下さい。  
☎〇九七五―35―〇九二六 西孝子へ

ていた。キャラバン街道は相変わらず、俗化しておらず平和な雰囲気に横溢していた。ツムリントールで飛行機に乗る原さん達と別れた後、長駆ヒレまで二日たどりつくとという強行軍でバステイが軒をつらねる目ぬき通りの一端にとび出し雑踏を歩いていた。次の日には、陽気なシエルパ達と車上の人となった。

登山中カトマンズでは世界情勢の波及からか、大規模なデモが頻発し騒然となった。一時は無政府状態となり、カフュー(夜間外出禁止令)が発令された。ほとんど革命であったとも言われる。そんな中、私たちはヒマラヤの山ふところでも少しも高みへ登ろうと号令をかけていたのであった。

異邦での生活を終えて、帰宅してみると、部屋のカレンダーがまだ二月のままになっていた。普段は意にも介さない私であったが二十八歳になった今度の遠征ではそれが少しこたえた。

人間と自然保護の調和が大切

環境危機に山岳会の対応は如何

村木副会長の自然保護講演会

自然保護委員会は七月十三日、村木副会長を講師に招いて講演会を開催した。副会長は広範な知識をもとに、環境危機に対しての現況と問題点を提起し、日本山岳会としての考え方の材料を提供する意図のものであった。その大要は次のとおり。

自然保護委員会の活動では、日本の登山の環境を守るという立場から、地味な仕事ではあったがフィールドマナーの発行は有難かった。しかし一般の環境問題、自然保護、動物保護の運動に追随するだけではない、登山者らしい自然保護運動はないのか、という思いはあった。

副会長に就任して三年、その間に「屋久島縄文杉ロープウェイ」「白神山、春秋林道の建設」「長野岩菅山オリンピックコース問題」それに「尾瀬問題」が主な問題であったと思うが、ここで山の現状を考えると、まず登山人口が激増したこと、第二に登山者の高齢化、若い頃から登っていた人ではなく、年をとってから登り始めた人が多く、それに地元の問題、過疎化対策、村起こしの問題などの絡み合いがあ

る。

私は自然は人の手を加えないことこそ価値がある、という思想には組み合わない。自然と人との関わりあいを無視して、自然を床の間に飾っておくような考え方にはついていけない。何故か、登山者自身が自然の中に踏み込み、自然を破壊しているからである。

JACが当面の目標としてたてている四つの方針がある。「登山の実行と推進」「先輩の文化遺産を守り充実する」「会員サービス特に中高年対策」「自然保護」だが、これらが互いに矛盾しないように対策をたてていかなければならない。この方針から見ると、自然保護については、人間との関わりあいのうえで自然を見ることが大切である。

例えば、森林を見る場合、都会人は憩いの場として森を見るが、この森を守り育て生活している人がいること、その人々の立場も考えないのでは、余りにも寂しい。

いま世界中で環境問題への関心が高まっている。環境に関する本も数多く出ているが、種本は一つである。地球

環境に関する最初の問題提起は、一九七二年のローマクラブのレポートであるが、一九八〇年にカーター大統領の要請によるタスクフォースのレポート(二十一世紀への進入 二〇〇〇年の地球研究)は立派なもので、現在論じられているすべての環境問題は、すべてこのレポートに網羅されている。たしかに大統領ではないと思われているが、このレポートを残しただけでも偉いものだし、アメリカというのは大したものだと思う。

このレポートは、人口、GNP、気象、技術、食料農業、漁業、森林、水資源、エネルギー、燃料鉱物、非燃料鉱物などの予測にふれ、人口の増大と都市集中化、農業への影響―砂漠化、水資源への影響―ダム建設のプラス、マイナス、森林消滅は食料生産に深刻な打撃を与えること。また、世界の大気と気象への影響では、大気汚染、酸性雨、地球温暖化、フロンによるオゾン層の破壊、その他、核エネルギーの問題にふれている。

このレポートを登山環境に当てはめてみるとその類似性は「登山人口の増大、便利さを願う高齢化登山者」「農業、林業の衰退、過疎化と都市集中化」「森林の荒廃、村起こし、人集めとしての観光開発」「天下の悪法―リゾート開発法」がある。

私の話は、JACの自然保護はいかにあるべきかを、会員全体で考えていただくための材料を提供しているだけだが、自然と人間の関わりを議論するために、私が影響を受けた三人の人をあげたい。

- 南方熊楠(一八六七年～一九四一年) 全集、著作集、随筆集、伝記多数のほか、評論「地球志向の比較学南方熊楠」鶴見和子著(講談社学術文庫)
- 富山和子
- 1 水の文化史 木曾川編 自然保護と林業 2 水の旅(文芸春秋社刊)
- 宇江敏勝
- 山びとの記 木の国 果無山脈(中公新書)

私は登山者として、人間との関わりにおいて自然をみたい。少なくとも自分分は自然を乱している一因だと自覚して、山をみたい。

環境と開発に関する世界委員会(WCED)報告書の中心的考え方、環境と開発は相反するものとしてではなく、環境を保全してこそ将来にわたって、開発が実現できるとの考え方にわたって、い。そして、登山者は、汚染者負担の原則を確立したい。また山は万民のもので大切な公共財として対応したい。

出席者 村木潤次郎、谷口現吉、松(関塚貞亨)

本恒広、澤井政信、藤江幾太郎、奥野道治、二本久夫、原謙一、松永康子、池田剛、大島輝夫、水村通子、西郷正郎、武田満子、三上智津子、木名瀬亘、横山隆、石橋正美、大塚玲子、山村正光、染谷美佐子、麦倉啓、山口俊輔、中村純二、中村あや、松丸秀夫、遠藤光男、斎藤かつら、河野之保、伊藤徹、藤井健、石田喜八、林田正幹、的場大祐、滑志田隆、大塚博美、岡野修、茂木洋子、中保、吉村健児、梨羽時春、田中茂夫、黒沢秀雄、松田雄一、渡辺正臣、関塚貞亨

### 〔自然保護委員会から〕

右の村木副会長の講演は、要旨にもあるように、一つの問題提起である。その問題とは、山岳の自然保護に対する本会の取り組み方として、人手を加えることにすべて反対するのではなく、そこに生活している人達のこともよく考えて調和のとれるような方向に向けるべきではないか、と言うことにある。これは、かなり重要な問題を含んでいるように思えるので、同副会長のご同意を得て、『山』紙上での討論を提案する。意見をなるべく簡潔にまとめ、自然保護委員会に「気付」で会報へ投稿されるよう、お願いする。締め切りは 十月二十日。

## 海外の山

### 一九九〇年—夏山事情

あいかわらずモンゴルに滞在中、日本からの山のたよりを楽しみに待つ身の上である。

寄せられた情報で知る限りでは、このところのオジサン、オバサンの元気に目を見張らされてしまう。

中国・シシャパンマ峰、八〇一二メートルを目指した、京都大学ヒマラヤ医学術登山隊の副総隊長、医師の斎藤博生さんが、六〇歳の年齢もものは、頂上を極めているが、そのザイルパートナーがやはり医師の中島道郎さんで、こちらは五九歳と聞けば、もう脱帽するしかない。

日本ヒマラヤ協会が、インドのサトパント、七〇七五メートルにおくりこんだ登山隊では、五二歳の遠藤京子さん、五〇歳の平川宏子さんが、もうひとりの五〇代男性とともに登頂して意気をみせた。

聞くところによると、来年秋には日本大学OBを中心に「チョー・オユー熟年登山隊」が企画されている由、参加資格は五〇歳以上だそうで、熟年組の元気はとどまるところを知らぬ勢いである。

一方で、遭難の知らせも届いた。横浜市大天山路査の会は、中ノ国境、天山路脈の最高峰、トムール峰、七四三九メートルで、隊長以下三人が行方不明。パンジャブのナンガルバット、八一二五メートル南壁に遠征していた川崎市教員登山隊では、登頂目前の隊員が滑落している。

明暗、いくつかのニュースであらためて思うのは、今老若男女、いかにさまざまの日本人が、いかに世界の山

々に登る機会に恵まれているか、ということである。

この夏、マッターホルンに登りにスイス・アルプスに出かけた家人からのたよりでは、ヨーロッパの山には、今年、「東側からの登山者」が目だったという。けばの立ったザイル、ズック製のザックで、彼らはガイドなしでルートに出ていく。多くの登山客が、山小屋に食事つきで泊まるのに対し、彼らは日本の避難小屋を思わせる素泊まり用の軒下のスペースで夜をすごしていたという。ルート上で立往生したものの、金がかかるから、救援へりは呼ばないでくれ、と申し入れてきたという話もあったそうだ。

やっと自由に西側の山に登れるようになった、彼らの熱い思いと、その経済的な苦しさ、両方がうかがわれる話である。

ひきかえ、世界中、ほぼ自由に歩ける国籍と、強い通貨、円を持ち、加えて世界一の長寿を手に入れたわれわれの、なんと恵まれていることか。それだけに、どうか事故なしで、「良い山旅」を重ねていきたい、とあらためて思う。

さて、モンゴルだが、広い草原を馬で疾駆する人々にとつて、山登りはあまりなじみのないスポーツのようだが、以前は信仰とからんで日常のひとコマであったらしい。たずねていったムンゲンモリットという村では、おりから近くの山の頂きにあるオボ、つまり天を讃える木や石のケルンを祭る行事が、ペレストロイカの波の中、五十年ぶりに復活、古老たちが馬や徒歩で登っていた。

登山もまた、その社会を写す鏡である。

(江本嘉伸)

## アンナプルナ登頂四十周年に参加して

日下田 実

今年六月十四日(木)から十六日(土)にかけてシャモニ市長主催でアンナプルナ登頂四十周年の記念イベントが“ANNAPURNA Premier 8000”と銘うってシャモニで行われた。メイ

頂したメンバーが招待され、日本からはマナスルの今西寿雄と私が、さらに一般ゲストとして女性でエベレストに初登頂した田部井淳子と一九七三年ヤルンカンに初登頂したAACK隊の上田豊が招待されこのイベントに参加し

た。主なメインゲストの参加者は別掲写真の通りであるが、中国のシシャバの二人とヒドンピックのピーター・ショウニング(米)、ガツシャブルムIIのフリッツ・モラベック(オーストリア)の四人が欠席しただけでほとんどが出席した。一般ゲストとしては五

れがシャモニに集った。  
ご承知のように一九五〇年六月三日にアンナプルナ主峰が登頂されてから世界の八千峰はつぎつぎに登られ、一九六四年五月にシシャパパンマが登頂されて八千峰の初登頂はほぼ終了している。ただ今度のイベントではカンチェンジュンガ中央峰(八四七八)を独立の八千峰とみなし一九七八年のポーランド隊の二人の登頂者をメイン・ゲストとして招待している。

### 追悼

## 元会員 小出 博氏

小出 博氏が亡くなったね、と言っても反応をみせる役員も少なくなつた。むしろ古い会員のなかに、故人に懐旧の念を新たにしたり人が多いかもしれない。新聞にのつた訃報によると七月六日、八十三歳であつた。小出氏と言えはすぐに思い浮かぶのが法政大学の高橋栄一郎氏(元会

は枚挙にいとまなくらい寄稿しているが、なかでも「岩登りに対する私考」(昭和六年)、山案内者の伝記的研究としてクリスチャン・クルツカー、メルヒオール、アンデルエック、アウグスト・パルマーなどを詳しく紹介しているのが眼をひく(昭和八年「山と溪谷」)。また「アルプスの山小屋」発達史と建設について数回にわたり、歴大な研究報文を発表しているのは圧巻である。

中畠政太郎と立ち話をして、いたとき、わきを通つた登山者が中畠に声をかけて行つたので、誰れ、と聞くと「六高の小出さんでせえ。あゝあの人が小出さんか」とときは思ったのだが、戦後になって私が母校の大学の理事をやるようになったとき、いろんな会合で小出氏と顔を合わせようになつたから妙なものである。農学博士、理学博士となつた氏は戦後になって東京農大の応用地質学の教授となり、農業工学科に研究室を持つて停年まで勤めていた。

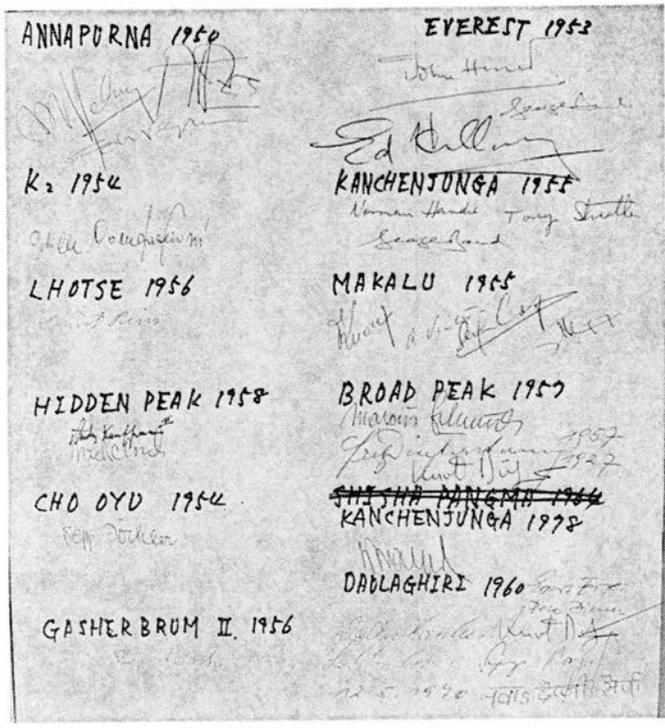
このポーランドの二人オレックとブルンスキはまだ四十歳代のみるからに精かなクライマーであつたが、あとのメイン・ゲストは私の六十歳は若い方は、ほとんどが七十歳に近いか、あるいはそれ以上の年配であり、四十年という時の流れを感じさせられた。  
とくにアンナプルナ隊では九名の隊員のうち現存しているのは隊長であり初登頂者であつたモーリス・エルゾーグ、写真担当のマルセル・イシャック、渉外担当のフランシス・ド・ノワイルの三人だけである。もちろんこの三人は出席したが、すでに故人となつたルイ・ラシユナル、リオネル・トレイ、ガストン・レビュファ、マルセル・シヤツ、ジャン・クジー等はそれぞれ未亡人や子供達が出席していた。  
さてこのイベントには実に盛りだくさんの行事が組まれていて全部に出席

小出氏と六高時代の山仲間であつた後の日本大学山学部部長清田 清氏(故人・本会々員)の著書『穂高・ヒマラヤ・北極』には小出氏との数々の山の憶い出がちりばめられている。

私は小出氏と往き来はなかつたが、学生時代夏の小梨平で、蒲田の案内人

残念なことに会員籍は戦前の末期に離れていた。昭和五年九月入会、会員番号一二三三、紹介者は浦松、鳥山、松方の三氏であつた。

(織内信彦)



〔写真説明〕

“ANNAPURNA PREMIER 8000” メインゲスト

この度のアンナプルナ登頂 40 周年の記念イベントに招待されたメインゲストは 8,000 m 14 座の初登者であったが、日下田氏の努力でその殆んどの方からサインを戴いてきた。サインでは読み難いので以下に解説する。(Y.M.)

- ANNAPURNA 1950 (佛)**  
Maurice HERZOG  
Francis de NOYELLE  
Marcel ICHAC
- K 2 1954 (伊)**  
Achille COMPAGNONI
- LHOTSE 1956 (スイス)**  
Ernst REISS
- HIDDEN PEAK 1958 (米)**  
Andrew KAUFFMANN  
Nick CLINCH
- CHO OYU 1954 (奥)**  
Sepp Jochler
- GASHER BRUM II 1956 (奥)**  
Josef LARCH

- EVEREST 1953 (英)**  
John HUNT (GB)  
Edmund HILLARY (NZ)
- KANCHENJUNGA 1955 (英)**  
Norman HARDIE (NZ)  
George BAND (G.B)
- MAKALU 1955 (佛)**  
André VIALATTE  
Guide MAGNONE  
Serge COUPE  
Pierre LEROUX
- BROAD PEAK 1957 (奥)**  
Markus SCHMUCK  
Fritz WINTERSTELLER  
Kurt DIEMBERGER
- KANCHENJUNGA 1978 (PL)**  
〈Kanch 中央峰〉  
Wojciech BRANSKI
- DAULAGIRI 1960 (スイス)**  
Ernst FORRER  
Peter DIENER  
Kurt DIEMBERGER (A)  
Michel VAUCHER  
Naurang DORJE
- LHOTSE SHAR 1970 (奥)**  
Walter LARCHER  
Sepp MAYERL

するのは困難であった。また興味のあるような会合に出席してもフランス語、英語での討論であり、英文の要約でもあればともかく私にとってはまったく判らなかつた。しかしこれらの行事のなかでも開会の日の午前中におこなわれた“ヒマラヤの環境問題について”と十五日夕刻から、エルゾーグ、ヒラリー、メスナー、イヴィス・レビソナス、ローレンス・フェリエールによっておこなわれた“これからのヒマラヤの登山”という討論がもっとも関

心をつめたようであった。とくに環境問題について”の討論には今西が日本山岳会を代表してスピーチをする予定であったが、飛行機のトラブルで到着が十四日の午後になってしまったのでスピーチができずたいへん残念であった。これらのことについては田部井が七月十五日発売の『岳人』に書いているので読んで頂きたいと思う。十五日には希望者はモンブランに登る予定であったが、前日までの悪天候で雪が多く、モンブラン・タキユル

とミデイのコスミック山稜に変更になった。田部井はコスミック山稜の組に入り、上田、日下田組はモンブラン・タキユルにむかつた。この日は素晴らしい天気恵まれ、田部井はフランス人とコスミック山稜を完登した。モンブラン・タキユルにむかつた組は出発時間がおそかつたのと、多量の積雪によって目的を達することはできなかった。しかし十数年ぶりにアイゼンをつけ、三十数年ぶりに四千近い氷河の上を一日歩くことができて苦し

かつたことは苦しかったが楽しい一日であった。このイベントの最終日のデイナリの席上、パリ・マッチ社からいままでのヒマラヤ登山に貢献のあった人達にそれぞれ賞が贈られた。またラインホルト・メスナーからも当代を代表するクライマーにスノー・ライオン賞が贈られた。受賞者は別掲の通りである。この賞のなかでもっともヒマラヤ登山に貢献したシエルパということでも個人のシエルパでなくシエルパ全員に名誉が

与えられ大きな拍手が湧きあがった。  
このイベントには一九五〇〜六〇年代に活躍した当時のトップ・クライマーも集ったが、トモ・チェセンをはじめカンチェンジュンガを縦走したソ連の若い人達等、当代のトップ・クライマーも多数集っていた。恐らくこの若い人達がこれからのヒマラヤの新しい時代をつくりあげていくに違いないものと思う。  
(文中敬称略)

**マッチ・ド・オーの受賞者紹介**

この度のアンナプルナ登頂四十年の集いの一環として、フランスのスポーツ旬刊紙 *Pari Match* 紙(登頂したアンナプルナ隊のスポンサーでもあり、今回の集会の後援団体でもある)は、これを機に八つの記念賞を贈ることに  
なり、その選考は出席者の投票による形をとり、出席者の間に多大の関心を集めた。もちろん日本から参加した招待者も各自一票を投じたことはいままでもない。八つの賞とは、  
①最も偉大な登攀をした人  
②最も困難なルートからヒマラヤの頂上に達した人  
③ヒマラヤでのパフォーマンス賞  
④近代ヒマラヤ登山に最も貢献した男性  
⑤同、女性

- ⑥数々の遠征に参加し最も貢献したシエル・パ
- ⑦ヒマラヤで最もすぐれた描写を行った写真家またはカメラマン
- ⑧明日のヒマラヤのヒーローとして最も期待されている人
- 受賞者の発表は最終日のディナーの席上五〇〇人をこえる人々の前で行われ、これに加えて名誉賞、故人に対する栄誉賞、シャモニーに対する特別貢献度賞、ラインホルト・メスナーによる雪獅子賞の四賞(①⑩⑪⑫)が追加され、フィルム上映による紹介と同時にトロフィーの贈呈が行われた。
- ①名誉賞  
Maurice HERZOG-Louis LACHE-  
NAL
- ②ヒマラヤ最高登攀賞  
Sir Edmund HILLARY
- ③難ルート登攀賞  
Chris BONINGTON
- ④ヒマラヤ・パフォーマンス賞  
Pierre BEGHIN
- ⑤近代ヒマラヤ登山部門別貢献度賞  
男性 Reinhold MESSNER  
女性 Wnda RUTKIEWICZ
- ⑥同 シェルパ All the Sherpas
- ⑦同 ヒマラヤ撮影賞  
Kurt DIEMBERGER
- ⑧明日のヒマラヤン・ヒーローとして期待される人

Tommo CENSEN  
⑩故人に対する栄誉賞  
Jerzy KUKUCZKA  
⑪シャモニー賞  
Jean-Marc BOIVIN  
⑫R・メスナーによる 雪獅子賞  
Tommo CENSEN (Y・M)

**ADRAの活動に  
参加して**  
金澤 守恭

ヒマラヤの峰を目指す者にとって、ネパールの人々の恩恵は忘れることは出来ない。トリブヴァン空港から一歩踏み出したときから、ネパールの方達の経済状態を実感させられる。  
お世話になっている国の人々のためにささやかでもお役に立ちたいと思いつ三月から三週間にわたってカトマンズの東三十八\*のパネバにあるSADのシニア病院で過ごした。  
全国の高校生を中心に大学生達を加えて二十八名が、寝袋で泊まりこみ、病院の給水設備と、電圧安定の工事を

してきた。この学生たちによるワークキャンプは、世界的なネットワークを持つているアドベンチスト国際援助機構(ADRA)の活動の一つなのだが織内元副会長のご支援も頂いた。  
ネパールには、ハンセン病の方々が十万人近くおられ劣悪な環境で生活をしている。コロニーに住む元気な子供達を罹病から守る家族単位の家が軒四十万円で出来るので、来年はその働きをしようとADRAは準備しているが、会員にこの活動への協力を求めているのはありません。  
日本山岳会としても、各国の山の仲間と共に、ネパールの方々の心情を理解し協力できる素晴らしいプロジェクトを持っていきます。  
会員のヒマラヤへのロマンの思いの僅かでありながらネパールの人々に分かちあい、互いにダンニャバード(有難う)との交わりを深めたいのです。  
「タンポチエ僧院再建募金」の日本の目標額が、一日も早く頂上に到達することを願っております。  
日ソ合作映画  
「オーロラの下で」を見る  
小倉 厚  
四十数年ぶりで狼の声を聞いた。一九四五〜四六年、私は戦乱のソ満国境

にいた。そこは凶暴なシベリヤ狼の跳梁する広大な地であった。吹きすさぶ敗戦の嵐の中に学友たちは次々に死んだ。狼の遠吠えはそれ以来である。懐かしくも悲しいまた恐い声だった。

戸川幸夫原作、後藤俊夫監督のペレストロイカ後初の日ソ合作映画「オーロラの下で」を見た。

画面は一九一五年の厳寒のシベリヤを舞台に壮絶な人間と狼の戦いに始まり、日本軍のシベリヤ出兵、ロシア革命へと続き、一九二五年、アラスカで実際にあった自然と人間と狼の壮大なロマンをうたいあげて終わる。広大無辺、荒々しく厳しいシベリヤの大自然、神秘的オーロラの下、人間たちと狼をして犬たちの演ずる真迫のシーンに心をうたれ目をうるませた。

主役は役所広司でもマリーナ・ズージナでもなく、母親が犬、男親が狼のオオカミ犬ブランが演ずる忍耐、忠誠、知力の前に霞んでしまっているようにすら感じた。

役所広司演ずるゲンジローはもちろん日本人。銃の名手。物語の終幕は伝染病で苦しむ子供たちに血清を運ぶためゲンジローとブランが固い信頼と友情のもとに力を合わせ、極北の荒野一〇〇\*に及ぶ長大な決死行である。厳しい自然の掟、襲いくる狼の群、つぎつぎに倒れる犬、その犬のとどめを

さす悲しい銃声、気の遠くなるシベリヤの雪原、子らの待つ村は遠かった。フィナーレは恋人との再会、見る人を見わず引きこまずにはおかない迫力があつた。そのオオカミ犬は功績が讃えられ今でもその銅像がニューヨークのセントラルパークにあるという。上映時間二時間。

それだけに製作の苦勞はたいへんだつただろうと推察される。実際のオオカミ犬の製作？(交尾・誕生)から西側人初の極北地域の撮映は実に三年を要したと解説されている。名作とはそんな努力と執念がなければ生れないだろう。制作は東映(株)、テレビ朝日、モスフィルムスタジオ、ソビエト合作公団、こぶしプロダクション。(八月五日記)

### スマトラ・クリンチ山へ

児玉 茂

西スマトラ州のプキティンギーはスマトラ島の西側三分の一を一五〇〇\*に亘って連なるバリサン山脈の中段、そしてそのバリサン山脈を縦に二分する地溝帯の中に噴出した、ムラピ、シランガラン両火山の裾野が形作る高原にある町である。私たち一行はスマトラ島の最高峰で、インドネシア第二の高

峰でもあるクリンチ山(三八〇五呎)を目指して、水牛の角を形どつたと言われるミナンカバウ様式の建物が美しいプキティンギーの町を後に、地溝帯の中を南下した。

スマトラではバタック高原のトバ湖が有名であるが、この地溝帯の中にも透明な水を湛えた湖水が連続し、一〇〇\*のドライブも飽きることがない。やがてスマトラ第一の大河バタン・ハリの源流域に入ると正面にクリンチ山が見えてくる。数十年前まではこの山に近付くだけでも容易なことではなく、一九三二年当時の「植生図」を見ると一帯は原生林地域となっていた。現在では日本軍が作ったといわれる道路に添って開拓集落ができ、その集落はやがて村と呼ばれる規模にまで発展している。東南アジア有数を誇った山間の大湿地も今ではみごとな水田地帯に変わっている。一九三〇年代から開拓された国営の紅茶プランテーションを前景にしたクリンチ山だけは昔と変わらぬ美しい姿を見せてくれる。

クレスイクトウオの集落(約一五〇〇呎)には登山者用の宿泊所もあり、ここがクリンチ山の登り口である。前述の紅茶畑を抜けて熱帯多雨林に入る。早朝にはシャマン(フクロテナガザル)の鳴き交わす大きな声が森中に響きわたりますがすがすがしい気分になる。

道は良く踏まれ、わかり難い分岐もない。この山は赤道直下(南緯一度四一分)にある高山ということで地理学的な興味を抱く者が多い。植物地理および生態学的に興味深いのは、二四〇〇呎から二八〇〇呎の高度にかけて山腹を一周する灌木/草本帯(とくにウラジロ属のシダおよび木生シダが多い)の存在は何に原因するか、未解決の問題を提供している。やがて灌木(ツツジ科が多い)も疎らになり三〇〇〇呎を越えた辺りからは火山碎屑物の大斜面となり、ルートとなる尾根の右手の谷には、ちようど岩石氷河のような姿で火山碎屑物が舌状に押し出しているのが見られる。最初に登りついた頂は三六五五呎のブラピ山で、ここに測量用の標石が置かれていた写真を見たことがある。今はどこかへ転がってしまっている存在しない。

頂上は巨大な火口を取巻く火口壁の最高点である。標高三八〇五呎ということであるが、私の持参の高度計では三七〇〇呎にも達しなかった。この山はまたの名をインドラプーラといい、神の山の意である。インド洋を航海する船から一〇〇〇呎級のバリサン山脈の上に高く突出したその姿が望め、航海の目標になった。当然ながら頂上からは弓なりの海岸線とサンゴ礁に白く縁取られたインド洋が眺められる。



火口の直径は約五〇〇呎、深さは頂上から五〇〇呎以上あり、急な火口壁は噴出溶岩が層状に重なっている。底を覗き込むと、湯だまり状態の白濁した湖が見え、噴気活動も盛んである。この山の最も新しい噴火の記録は一九六四年七月のもので、その時は噴煙が頂上から二〇〇〇呎も吹き上がり大量の火山灰が降り、川の魚が浮上ったという。その後は小さく噴煙を上げる程度で今日に至っている。

クリンチ山の南の、地溝帯内の断層に添って温泉があり、私たちもここで汗を流した。源泉の温度は九十二度あり、無色無臭。長い水路を通わせて温度を冷まし湯船に導いている。バナナの葉を吹きわたる風は一風呂浴びた体には涼しく感ぜられ何とも心地良か

った。

日時 一九九〇年六月二十日

参加者 錦織保清、松永康子、高本信子、佐藤知恵子、児玉茂、ジョコ・プリアディ

### ウェストン祭

### 四十年の回顧(上)

坂倉登喜子

第四十四回ウェストン祭は、北アルプスの山開きを兼ねて、去る六月三日晴天に恵まれ約千人の参加者を迎え、盛大に催行されました。

当日は例年の通り信濃支部主催により午前十時より梓川河畔において碑前祭が行われ、第一部では「ウェストンに捧げる歌」を四十五名で献歌した。第二部では私が最多数参加者と言うことで「初期のウェストン祭と女性登山の歩み」について、JAC信濃支部よりの依頼を受けて思い出話をした。

#### 以下講演の抜粋

「生きてまた今年も緑したたる上高地の自然と、全国から集った皆さまとの出会いを楽しみに、ウェストン師が越えた徳本峠を越えて、ウェストン祭に参加させて頂きました。

夜行、一泊、直行組に分れて上高地に集り、今年三十四回目のコーラス参加を致しました。

ウェストン祭が始まって以来、過去四十数年をかえり見ますと、いろいろの思い出が甦えつつ参りますが、当初からずっと続けて参加されていた大先輩の、尾崎喜八先生や藤木九三先生、日高信六郎先生、横有恒先生の諸登山家の方々が、既に他界されまことに淋しい極みでございます。

ふりかえって見ますと、初期のウェストン祭は、前夜祭が小梨平で行われ、NHKが実況放送をしました。その時コーラスをしたのは四、五人ぐらいで、その中で女性は私一人でございます。その当時の参加者は今思い出せないほどで、残っておられません。

昭和十二年にイギリスの宣教師ウェストン師の業績をとどめるため、喜寿祝いを記念して氏のレリーフを佐藤久一朗氏が作って、梓川のほとりの岩にとりつけられました。その後戦時中取り外されていきました。

昭和二十二年六月には日本山岳会がこのレリーフを元の場所に戻し、復旧式を行ったのが、ウェストン祭第一回となり、信濃支部の発足式が行われました。第五回より日本山岳会から信濃支部行事に移り、現在まで地元の皆様方のご協力により続けられ、第六回頃より岳人の祭典となり、北アルプスの山開きを兼ねたウェストン祭には、全国からの参加者を迎えて、盛大に行わ

れるようになりました。

その頃は知名登山家の講演会や記念山行が計画され、一時期七月に槍ヶ岳や穂高岳登山や自然観察などが行われました。初期の信濃支部長だった尾崎喜八先生が同行して、植物や小鳥の声の指導をしながら、徳沢あたりまで散策し、先生のドイツ語の歌を聞かせて頂いたことは今でも忘れられません。

その頃私達も穂高へ登りに行きましたが、大雨で横尾の一本橋が流され下山できなくなり、山小屋に泊り屋根裏の室でコーラスの特訓を受け、帰途一枚岩の上でもコーラスをして岳沢から下山したら、エーデルの一行は遭難したのではないかと噂が飛んでいて驚きました。結構楽しんでました。

当時は上高地までの道は川沿いになって、大雨の後は崖が起り、バスが不通になることが幾度かありました。中ノ湯の野天風呂のへりを歩いた時、白がすりの男のおげが出て驚かされながら、釜トンネルの暗い中を徒歩連絡して、上高地入りには随分昔は苦労しました。初期の頃はトラックに乗せて貰った車のふちにしがみついで、こわごわ三時間間位ガタガタ道を揺られて、やっと上高地に着くまでに乗物で疲れてしまいました。大正池の近くで穂高連峰がぐっと迫ってくると、手をたたいて感激し泣きました。続く

〔俳句〕

ウエストン祭の頃

小林 碧郎

焼岳の崩えつつ立てる新樹かな  
啄木鳥の銜あかるし楡芽吹く  
狸々袴標を解くやすらぎに  
筒鳥や雪掻きひらく峠小屋  
残雪の穂高かがよふ布団干  
青羊齒に声紛れなしみそさざい  
朝日濃しウエストン祭の棠梨匂ふ  
巖に寂びウエストン碑の滴れり  
暮鳴くや森に花敷く二輪草  
藻の花に紛れて躰る岩魚かも  
嘉門次小屋はやき湯浴みに鳴く目細  
夏炉焚く壁に遺愛の村田銃  
岩魚酒あるじ機嫌の安曇節  
下山者の靴音かろし岩かがみ  
日の渦となり吊橋に柳絮舞ふ  
虎つぐみ早発ちの灯の森に揺れ  
夜鷹鳴き穂高奥宮朝ともす

梅ふかく明けゆく雨の時鳥  
雨つばめ梅雨雲払ふ槍ヶ岳  
雪溪へ登路ふみ入る雲の中

第二回 親不知ウエストン祭

去る五月十三日、第二回「海のウエストン祭」が親不知記念広場のウエストン像前にて約一〇〇名の参加者と共に行われました。

W・ウエストンは、九十六年前の明治二十七年七月十九日（一八九四年）に白馬岳登山の際、日本アルプスの末端を確認するため、飛驒山脈が日本海に落ち込む青海町親不知の断崖を訪れたのです。この時の紀行はウエストンの著書『日本アルプスの登山と探検』に詳しく紹介されています。

このゆかりの地にウエストン像を建立しオープンしたのは、来青同月日の昭和六十三年七月十九日であります。ウエストン祭は、上高地が四十数回を経てよく知られています。堀金村、芦安村、高千穂町などでもいろいろな行事が行われているようです。青海町では、昨年から山岳同好会のカタクリクラブ（会長小野健）主催・青海町後援で行われるようになりました。今年には梅海新道最北部の坂田峠へ親不知間を

ハイキングした後に、記念広場のウエストン像に献花し、女性合唱団の特別出演と参加者全員による雪山讃歌に日本海の潮騒も加わった混成合唱で飾りました。そして会場を町民会館に移し、ウエストン研究者三井嘉雄氏の特別講演会を開催しました。三井氏は講演の中で、直江津から糸魚川まで漁船を使い、人力車を乗り継いで青海から天下の険親不知を見学した後の白馬岳登山行程を詳しく話され、合わせてウエストンの人柄にも触れました。ウエストン研究の第一人者である氏は、最近日記から明らかにした新事実も紹介されました。

平成三年のウエストン祭は、五月十九日から二十六日の間に行う予定です。皆さんの参加をお待ちしています。（越後支部・小野 健）

山の回想

樋口 宗一

今は昔と違った山歩きを味わっている、年のせいかもしれない。

若い時代には征服感を満たすために、より高度な山を選んで登る。越後の冬山は積雪が多く、登るのに夏時間の倍近い時間が掛り、また当時の装備は今から見ると貧弱であった。ビニロ

ン製のヤッケやオーバーズボンに防水加工して山に出掛けるが、水分を多く含んだ雪では、ラッセルなどですぐ防水が落ち衣類を濡らしながら登ったものである。頂上では雑木で焚き火を作り、濡れた衣類を乾かしながら、酒を飲み楽しく昼食をとった思い出が残っている。越後の沢は、滝と淵の連続で、巻くにしても猛烈な数で相当なアルパイトを強いられる。また沢の左右は藪のため風通しが悪く夏の湯水期には日射病の恐れがあり、敬遠されてきた。

越後支部の名誉会員で、地元の笠原藤七氏の登られた栗ヶ岳東面中股沢遡行の記録を読み、私も登ってみたが、標高一三〇〇mにも満たない沢ではあるが、越後の沢の中では、悪場としては第一級ではなからうか。

私は谷川岳の沢にも随分登ったが、一番の思い出は寒冬のマチガ沢に登った時のことである。沢筋は寒さで雪崩の心配はないが、所々に青氷の壁と稜線近くでは雪庇が張り出していて、ルートを決めるに苦労したが、ピッケルで崩し足場を切りながら登る。凍りついた稜線を肩の小屋に向かって移動中、私の不注意で万太郎沢側に滑落、一瞬の内に約十数m流され、ピッケルで制動をかけて停止し、命拾いした思い出がある。そんな冒険的な登山ばかりしていたので、藤島前支部長に

「君の登山は邪道だ。山を満喫して、静かに歩くものだ」とよく言い論じられたものである。ここで今は亡き藤島玄氏の思い出を少し書いてみたい。

藤島玄氏は二回程、私の家に泊まられたことがあるが、最初は五泉市で市民対象の「飯豊山を語る会」の講師として来られて講演終了後、私と二人で家に帰り母の作った遅い夕食を三人で食べた。私は当時酒はあまり飲めず、藤島氏が酒好きだということをつい忘れていて、夕食が終る頃やっとな気がつき「これから酒を買ってきますから、待っていて下さい」と頼んだが、「たまには酒抜きで美味しくご飯を戴いて良かった」と言われてほっとした。その後新潟市祝町の藤島氏のお宅にお邪魔したことがあるが、六帖の書齋に案内され、ぎっしりとある著書や参考書に驚き、昼食には奥さんの手製のカレーライスをご馳走になり、用を足して帰って来たことがある。それから飯豊山の帰りに新潟迄の汽車の便がなく、またわが家に泊られた。その時には忘れずに酒を出して充分に飲んで戴いた。

起こして、痛むため、手術が長期通院が必要だと診断され、迷っていた処に、藤島氏が来られたので相談に乗って貰い、子供が大きくなるまでに膝を完全に治してから、また登り始めて遅くないからと言われ、またJACの方も一時休みの手続きを取ってやるからとのことで、私も決心した。医者に通いながら心機一転、海の小型船舶国家免許を取得し中古のボートを買い、魚釣りをおぼえた。新潟東港沖にボートを浮かべ、キスを釣りながら日本海から眺める残雪を抱いた飯豊連峰の杓差岳はたいへん見事で、山への郷愁を感じさせられた。膝の治療の方も進み、五頭山を歩いて見て、痛みは感じないほど回復していた。今後また山へ登れる見通しがつき、この際煙草を止めて、肺の力を付けて置きたいと思いい煙草をやめた。

一昨年の五月、新潟県五泉市内の大蔵山で山開きが行なわれ、友達の誘いで本格的な登山を久しぶりに味わった。当日は快晴で、若葉の香るブナ林に登り、また懐かしい山の匂をかきながら頂上に着いた。流石に山頂よりの眺めは素晴らしく、快い疲労感が身体全体に走る。この山行きを機会に、また山の魅力に取り憑かれ、二王子岳、御神楽岳へと登る。六時間以上の登りでも煙草を止めたせいか呼吸は苦しく

はないが、足は弱くなっており、足のトレーニングの必要性を痛切に感じ

る。 今後は、若い頃に果たせなかった南北アルプスや、北海道の山々と全国の名ある山々を歩いてみたい、昔加入していたJACに復活して山の情報を集め、今後の山行きの参考にしたい。

昨年から歩いた主な山は、鹿島槍、北岳、谷川岳、飯豊連峰の北股岳、新雪の巻機山、また今年に入って厳冬の八ツの赤岳と横岳、守門岳、飯豊連峰の大石山と活躍中である。私もJACに復活して良かったと思っている。それは行く先々の山の情報を、地元会員の方々に電話で照会し、正確な情報を教えて貰ったり、またご指導を戴きこの紙面を借りて深く感謝を申し上げたい。(越後支部)

### 和賀山塊を思う

三原 洋子

和賀岳は、岩手と秋田との県境にある。標高一四四二・二メートル、川を溯る外は必ずどこかを越えなければ登れない。周りの主な山には薬師岳、高下岳、大荒沢岳、朝日岳、志戸内倉、モッコ岳、積雪期、無雪期、いつも好んでこの

山塊を歩いていた。山は深く、仲間がいて地図があれば、やりたいことはいくらでもあった。

ずっと以前、大荒沢を女性三人で溯行したことがあった。沢沿いの林道をのどかに歩いていたら、ダンブカーが追い付いてきて乗せてくれた。砂防ダム建設用の飯場があった。

こういうところに泊まるのは初めてだったが、現場の男性たちは皆穏やかな顔をしていて、家に帰れば好いお父さんなのだろう。賄いのおばさんがいて、彼女の小さな部屋に私たち三人を入れてくれた。

翌早朝おばさんは、ご飯を食べてから行きなさいとしきりに止めた。大きなボールに山盛りの岩魚を見せてくれたが、それは、誰もこない山奥に現れて、思いがけなく泊ってくれた若い娘たちに食べて貰おうと、おじさんたちが張り切って漁ってきたのだという。

この山行を終えたあと、私たちはこのことが残念でならなかった。でも、未知の沢の溯行を考えると、あれからご飯を炊いて、岩魚が焼けるのを待つ時間はなかった。

大荒沢は、詰めが急斜面で、細い瀨に四苦八苦し、最後は灌木にぶら下がるようにして稜線にとびだした。そして、いくつかの山を越えながら帰った。

最近、久しぶりに和賀岳に入ったが、ここを通る登山者もまれになったようだ。稜線の道の灌木は、雪と風に痛めつけられることはあっても邪魔をする人はなく、這いつくばりながら少しづつ成長し、そこを歩くと、がっちり堅く伸びた枝が、いちいち足首に突きささった。風の影響を受けない場所では藪が深く、つま先で道を探りながら通過した。

この時の同行者は和賀山塊の佇まいに感激し、道の刈り払いをやりたいと意気込んでいたが、それは、どこかの許可が必要かもしれず未だに実現はしていない。

飯場のおばさん、おじさんたちはいま、どうお暮らしか。砂防ダムはどんな形で残っているのか。近頃珍しく自然に戻ってしまったか、それとも、あのあたりも開発が進められているのか。

気にはなるけど、いまの私にはどうしようもない。

### 南アルプスの登山史を

田畑 真一

北岳などを仰ぐ山梨県中巨摩郡芦安村は、いわば南アルプスの村といっても過言ではないと思う。

このたび同村では、同村に係する

「南アルプスの登山史」を一項に含む村誌の発行計画が具体化した。村役場には村誌編集事務局(電話〇五五二一八八―二一一一)も設置され、平成五年の発行予定に備えている。また、当局では従来の関係登山史にみられなかった資料・情報などの収集につとめている。

幾多の先人アルピニストを育て、そして活躍の場であった仙丈岳、鳳凰山などの芦安村であれば、何としても「南アルプスの登山史」に目の目をと考える。資料・情報についてお心当たりのある方は前記へご協力を願いたいとのことである。切に各位のご支援、ご協力をお願い申し上げます。



図書

紹介

片雲往来PARTⅢ

〔第一部〕

語らいの山々

上村 幹雄

またまた越後副支部長の上村幹雄氏の本がでた。題名の通りPARTⅢだから三冊目であり、しかもそれが〔第

一部〕と銘うっているから近く〔第二部〕も出版されることになるという。本書の内容は大きくは二部に分かれている。まず前半は「新潟日帰りの山々」阿賀北の山々Vで三十六編が収録されている。日本国、二ノ俣峠、蒲

山塊、天蓋山、鱧山……といった東京ではなじみの少ない山々が並ぶが、地元新潟に住む人々にはたいへん貴重なガイド兼読物と言えよう。また県外の人々にとっては日帰りの山々ではなくなるかも知れないが、地元の精通者が書いたものだけに、新潟を訪れる際にはまことに信頼に足る参考資料となるだろう。

後半は「泊りの山々・北の山」と題して十九編の山行記録が集められている。飯豊連峰、粟島・佐渡の旅、北海道、大朝日、関東の山々といったところは全国的である。

いずれも短歌あり詩あり、俳句あり随想ありで筆者の多才さが見られ、読むうちに故藤島玄氏の『越後の山旅』に似ていることに気付くだろう。事実「序」にも筆者が「……山に行く毎に記録に纏めると、先生の『越後の山旅』上下二巻がどんなに優れた名著かを改めて感じる……」と書いているから大いに参考にしたものと思う。

本書を手にした人はまずその厚さに驚くだろう。製本をのぞくすべてが手

造りというからたいへんな労作だと思ふ。いかにも越後人らしい忍耐強さと誠実さをそこから感じさせられる。惜しむらくはせつかくの労作だが、やはりワープロの文字のままではやや読みにくい点が残念だ。

平成二年五月二十二日 B5判 七一八頁 頒価一五〇〇円(送料別)  
申込先 951新潟市関屋金衛町1-16  
上村幹雄 025-266-508  
6 (小倉 厚)

### 静岡大学西域学術登山隊 報告書 一九八九

静岡大学刊

一九八七年六月九月静岡大学が中国科学院と合同で中国新疆ウイグル自治区に学術登山隊を派遣した時の報告書である。

学術隊は日本人として殆んど未踏の地を対象に広汎な自然科学分野にわたる調査をなし、登山隊は未登の皇冠峰七二九五mに挑戦し惜しくも七〇〇mで引き返している。

学術隊の報告は同地区の自然・民族・農林業の立地条件、野生果樹・栽培果樹・野菜園芸、牧畜、植物の調査・分析結果等が詳細に記され、中国語・英語での報告部分もあり合同学術調査としての国際性も配慮されている。



から。

平成一年十月十二日 ペリかん社刊  
A5版 五三〇頁 定価三二七〇円  
(斎藤清明)

### 青雲の弥彦山

花井 馨編著

越後西蒲原郡の景観的象徴をなす国上・弥彦・角田山塊は、第三紀層の丘陵地帯を抜いて噴出した火山で、標高こそ低い山裾は日本海に沈潜し、随所に断崖絶壁をかけ、奇岩怪石を波濤が洗っている。その盟主弥彦山は、越後一宮の「おやひこさま」が鎮座まします神山として、万葉の昔から人々に崇敬され、周辺一帯は越後文化発祥の地であり、妙多羅天女や酒吞童子などの伝説や史蹟にも富む。

そんな弥彦山の、ほぼ大正から昭和に亘る歴史と変貌の姿を、花井馨氏が登山家と万葉研究家の視点から、登山に関わる主題に絞って編集したのが本書である。花井氏は本会越後支部会員で、元弥彦郵便局長、弥彦万葉の会長、弥彦山岳会名誉会長の肩書きをもつ篤学の士である。書名「青雲の…」は、万葉集の弥彦歌「伊夜彦 おのれ神さび 青雲の棚引く日すら 小雨そぼふる」から採った。内容は、発刊のことが、六つの章、

あとがきからなる。第一章「弥彦山登山先駆者の回想」五編は、弥彦山との関わりなどを綴った藤島玄氏と花井氏の、先達としての筆が歴史の重みを伝える。第二章「弥彦山登拜道と滝ノ沢」は、花井氏「神剣峰への登拜道」、佐藤一栄氏「弥彦滝沢」ほか三編、一昔前の弥彦山が懐かしい。第三章「弥彦山塊三山縦断」の紀行と記録四編は、各執筆者がそれぞれこの山塊の四季折々の情趣を活写している。

第四章「弥彦山の景観と山岳展望」には、花井氏の二編と山崎幸和氏「弥彦山頂から見える越後の山々」が載る。山崎氏の描いた展望図は苦節十四年の労作。第五章「高頭翁寿像と松明登山祭」は八編、弥彦山を訪れた著名登山家の人物紹介や松明登山祭の由来説明などが興味深い。第六章「万葉集の弥彦山」三編は、鈴木彦雄氏（元弥彦神社権宮司）と花井氏の作が万葉研究の造詣を示す。あとがきで渡辺富衛氏が編集の経緯を語っている。

本書は、花井氏の弥彦山への情熱が結晶した畢生の作で、弥彦山登山の必読文献である。  
一九八九年十二月二十五日 弥彦村教育委員会刊 二二四頁 定価一五〇〇円  
(筑木 力)

### 秋田のハイキング

藤原優太郎編

ガイドブックでの山の紹介は、有名山など標高の高い山々が大方であり、信仰など古来より地元のシンボルとした低山などの紹介は意外にも少ない。

本書は、ふるさと再見とも言うべき内容をモットーとしており、山のみならず湖沼、溪谷、高原、峠など各地域内の名所をおお方網羅している。高齢化となった現在の登山界に相応しく、一読すべきハイキングの本と思う。

なお、姉妹編として「秋田の山」がすでに発行されているが、相違点多く再編の必要性あり。  
一九八九年十二月 無明社出版刊  
二二三頁 定価一三〇〇円  
(佐々木民秀)

### 新作「西穂高歳時記」

山岳映画 西穂高 山荘

企画 西穂高山荘  
制作 ツカモト・プロ

「播磨」「青春の穂高」「燕岳の四季」「栄光最後の記録―エベレスト」など国内の優れた山岳映画を撮り続けてきた塚本福治郎さん（ツカモト・プロ）が二年余を費やして撮映した新作。

穂高連峰の西端、西穂高岳は言うまでもなく上高地から手軽に登れ、しかも北アルプスの魅力を十分にそなえた人気のある山である。

この映画は、西穂高岳の稜線にある西穂高山荘の創立者、村上守さんの山での人生観を通じて西穂高岳周辺の四季折々の自然を織りまぜながら、人間と自然のドラマを描いたドキュメンタリー作品。

村上さんは、現在八十二歳、北アルプスの山小屋主のなかでも長老格、かつて自然保護と遭難救助の協力で叙勲を受け山岳界に多くの功績を残している。

「ひとりの山男を通して、穂高岳の自然の素晴らしさを描き、そして自然保護と安全登山を訴えたい」と塚本さんは語る。

ちなみに、西穂高山荘は今年、創立五十周年を迎え、その記念事業のひとつとして制作されたものである。

蛇足ながら、最近北アルプスの古い山小屋や山荘では映画作りが盛んである。すでに穂高山荘、槍ヶ岳山荘、燕山荘などで作っているが、いずれも宣伝臭さもなく、北アルプスの自然の素晴らしさと登山の楽しさを存分に描いているので好感もてる映画である。幸いビデオでなく十六ミリフィルムによって撮影されているので、迫力ある映

像をスクリーン上で楽しむことができ  
る。山の映画会などでは格好なフィ  
ムであろう。

なお、「西穂高歳時記」も十六リッ  
フィルムによって撮影制作されてい  
る。VHSビデオ版も用意されている。

十六、映画 文部省選定 三十分  
同作品の問い合わせはツカモト・ブ  
ロ 〇三七八三―七九一三番へ  
(フィルム委員 羽田栄治)

報告

冬期マッキンリーの  
登山と気象遭難 (1)

科学研究委員会

平成二年二月十七日(土)午後一時半  
から、本会ルームにおいて、標記の講  
演会が催された。

1、マッキンリー南壁の登頂

ドウ  
ベキアルパインクラブ 渡辺玉枝氏

一九七七年六月二十三日、隊員五名  
でカヒルトナ氷河にBC、翌々日南壁  
に取り付いて、C2の上でアメリカン  
ダイレクトルートに入り、五〇〇〇以  
地点にC3、七月十三日稜線直下でピ  
ーク、翌日風雪のため稜線に出た所  
で七時間待機の後、二〇時全員登頂。  
女性としての南壁登頂は七一年、フラ  
ンス女性がカシニールトを登って以来  
二人目であった。

気象は二三日周期で変わり、午後  
はたいてい降雪となったが、七月六日  
から一週間晴れた。気温はBCで一〇  
〜一〇°Cであった。

2、冬期マッキンリー登山

「植村直己物語」撮影隊 木本 哲氏

一九八五年三月十八日から四月二十  
二日かけて、ウエストバットレスル  
トを登った。厳冬期は過ぎていたが、  
また下部では夏のクレバスは新雪の  
ためあまり見受けなかったが、上部で  
はクレバスの幅や数が日毎に変化し、  
氷河は動いている感じがした。五二五  
一〜のC5(イグループレックス)から  
上は全く風を避ける場所がなく、強風  
の際は体を持って行かれそうになっ  
た。凍傷にかかったりした。「風」がや  
はり最大の困難で、プラトードのガス  
と共に、風を見極めないと、天気が良  
くても行動は不可能である。四月十八  
日七名で登頂。気温は一〇°Cであった。

その後五月十三〜二十四日にアメリ  
カンダイレクトルートからアルパイン  
スタイルで南壁を登った。雪のため岩  
棚で二日間停滞を余儀なくされたが、  
寒気と風はあまり厳しくなかった。二  
十二日に二名で登頂し、ウエストバ  
ットレスルートを下山した。

3、気象遭難における風についての考  
察―ヒマラヤとマッキンリー―

かもしか同人 大蔵喜福氏

エベレストやマッキンリーの厳冬期  
登山では一〇°C以下の寒気や低圧も問  
題であるが、最も恐ろしいのは「風」  
であると考えられる。

一九八三年、私もはず東大工学  
部の境界領域研究施設において、人体  
実験を行った。実験方法はエベレスト  
登頂時の完全装備で男性三名が風洞に  
入り、五分間に五m/sの割合で風速  
を大きくして行くというものである。  
冬山用ロープで自己確保をし、行動で  
きる範囲でたるませておいたが、安全  
対策として、風上〇・三の所に命綱  
を張るとともに、風洞の吸込口には丈  
夫なネットを張った。  
実験結果に多少の個人差は見られた  
ものの、大要は次の通りであった。風  
速が二七・五m/sになると足の運びに  
難が出、とくに氷雪の斜面では自己確  
保が確実でないと思われ  
た。三〇・〇m/sになると歩行は不可  
能に近く、短い歩幅で慎重に深い前傾  
姿勢で動かないとバランスが崩れた。  
ただし呼吸は可能であった。三三・〇  
m/sでは呼吸もし難く、直立可能な  
耐風限界であった。この実験値は計算  
による耐風限界値とも一致した。  
ただし高山では気圧が低く、それに

従って風圧も小さくなるので、八八四  
八のエベレスト頂上だと耐風限界値  
は五二・九m/s、山田隊遭難のマッキ  
ンリー五五〇〇では四三・八m/sと  
計算される。なお、風洞内では風速が三  
三・〇m/sを超えると、坐っけても  
体が移動するなど体験できた。「続く」  
(中村純二)

北海道初夏山行

道南「狩場山」

北海道支部

「山岳会は山に登る会であり、もつ  
と山行の回数を増やして欲しい」と、  
三月の支部役員会に要望され、少な  
くとも四季に各一回くらいは企画して、  
この広大な北海道支部の会員が少し  
も多く参加できるものにして貰いた  
い。とかくサロン化しつつある現状を  
脱却するために、また近年中高年者  
の登山指向に対応するためにも、是非  
実行すべきだ、との結論に達し、改選  
された山行担当委員の手で本年度の山  
行事業計画(後述)が発表された。  
こししばらく「エゾつゆ」の影響で  
肌寒い曇天が続く、初夏の爽やかな山  
行は期待できないのではと、天候が危  
ぶまれていたところ、六月下旬に入っ  
て晴天が続く、月末の多忙な時の山行

なのに二十名もの参加希望の返答があり、中身の濃い会山行にしようと二十五日夕方委員の打合せ会を行った。

三十日午後、快晴の札幌大通公園に集合し、予定通り出発ができた。札幌バスから小樽・余市・岩内へとひた走りに進み、途中昨年開かれた「はまなす国体」の山岳競技会登攀の会場跡を仰ぎみて、義経ラインを下下し、午後五時すぎに今夜の宿泊地「千走川温泉」に到着した。すでに函館出発班が先着していて、まずは冷たいビールで迎えられた。

会食は午後六時半から行い、テラピアの刺身、イカ刺、ヤマベの塩ふり焼き、イワナのフライなどのほか山菜などもたくさんでお膳を賑わし、宴会が盛り上がるなかにさらに差し入れが入るなど、このほか温泉前の広場で盛大に花火大会?を開くなどして、明日も晴天が続くよう、お天気祭りも夜の更けるのも忘れて続けられた。

七月一日快晴無風、気温も朝から二十度近くになっている。午前七時半全員マイカーに分乗し賀老高原新千走コース登山口へ向かう。登山口で身支度をして予定通り尾根コース班と沢コース班に別れて午前八時登山開始する。まず尾根班は新緑の木漏れ日を進み、受けながら最初の急坂も元気に進み、ダケカンバとチシマザサの続く道を進

むが、このコースは四、五年前に新たに開削されたばかりで、刈り込まれた根曲り竹の切り株が足元不安を抱かせて登高が遅れる。午前十一時すぎ南狩場の大雪渓に出て、さらに稜線に出る。と展望が開けて、日本海と太平洋(噴火湾)の両方が見られる。狩場山(標高一五二〇)頂上には予定を若干遅れて午後〇時半に着く。やはり地球は丸かった。北東に積丹半島、東北東にニセコ・羊蹄、南東に駒ヶ岳、南に遊楽部岳さらに遠く大千軒岳、南西に奥尻島の大展望となり、一同疲れも忘れて頂上ビールで登頂を祝った。

さて、沢班は同時に出発したが、幾重もの滝や函に阻まれ、時には深さ二メートルの滝壺を文字どおり泳ぎ渡り、さらにオーバーハンングをアップザイレンするなどして苦闘を重ね、上部の二股が大雪崩のためか沢状がすっかり変わっていたため、突っ込む沢を間違っていたに寄り過ぎ、とうとう丈余の根曲り竹のヤブに迷い込んでしまった。一時間

半の悪戦苦闘の結果ようやく真駒内コースに抜け出て、尾根コース班との合流には随分遅れて心配かけてしまい、午後一時半に頂上に達した。尾根班の一部のメンバーが残っていてくれてホットコーヒードで登頂を祝ってくれた。尾根班は予定通り東狩場経由で下ったが、沢班は疲労も激しく大事をとって

て新千走コースを下って登山口に午後三時半に下山した。車で賀老高原駐車場に戻り、尾根班を迎えにでて午後四時十分全員無事下山し、反省会ののち午後四時半再会を約して現地解散となった。

〔参加者〕 赤石喜恵子、大久保五郎、亀井秀子、小須田喜夫、桜井仁、佐々木喜一、澤田良子、高澤光雄、高橋恒志、竹内勉、野田四郎、長谷川耕司、福島勉、藤野和男、水科行雄、柳田涼子、山上郁子、山田哲郎、横内泰美、横田春雄、ほかにアイヌ犬ハル、クロ。

- 平成二年度北海道支部山行計画
- ①初夏山行 狩場山(千走川温泉) 平成二年六月三十日～七月一日
- ②初秋山行 十勝岳(十勝岳温泉) 九月二十九日～三十日
- ③初冬山行 小天狗(定山溪温泉) 十一月十一日 日帰り
- ④初春山行 チセヌプリ(チセハウス) 平成三年三月十六日～十七日 (水科行雄)

### 会務報告

#### 七月理事会

七月十二日 十八時三十分  
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、重廣、早坂、入沢、

穴田、小倉、関口、松本、織田沢、石橋、藤井、伊丹各理事、小倉、鳴原、大島各常任評議員、日下田評議員  
委任出席 小林理事、太田、飯野両監事、橋本常任評議員

#### 議事

(1)会長挨拶  
昨年度は、組織、委員会制度の見直し、規定類の変更まで手が廻らなかつたが、今年度は是非とも実施したいと考えているので協力願いたい。  
(2)シャモニー、アンナプルナ登頂四十年記念集会の報告……日下田評議員 今回の催しは「Annapurna Premier 8000」の名で、人類初の八〇〇〇峰登頂のお祝いの中で、日本からは今西、日下田、田部井の他、ヤルンカンに初登頂した上田氏も招待されて出席した。八〇〇〇峰十四座登頂の三十二名がシャモニーに集り(シシャバンマの中国隊は欠席したが、ポーランドのカンチ中央峰を含めると十四座になる)盛会であった。

(編者注五)七頁の記事参照のこと  
(3)ヒマラヤン・アドヴェンチャー・トラストの準備状況報告  
七月二日に労山の事務所まで田部井以下、JAC、日山協、HAI、労山の関係者が集り、開催日時、場所、会則、委員の人選、資金集めの骨子をまとめた。

日時 一九九一年十一月九日

図書受入報告

図書懇員会

平成2年7月受入図書

1. 寺田甲子男著「谷川岳 大バカ野郎の50年」白山書房 1990 (版元寄贈)
2. 金沢医科大旅行部編「山男 南船北馬号」古川脩覆刻 1990 (古川脩氏寄贈)
3. 中山再次郎著「関西スキー倶楽部報告1」古川脩覆刻 1990 (古川脩氏寄贈)
4. 中山再次郎著「関西スキー倶楽部報告2」古川脩覆刻 1990 (古川脩氏寄贈)
5. 中山再次郎著「丹後半島及び但、因、幡、美国境付近スキー地案内」古川脩覆刻 1990 (古川脩氏寄贈)
6. 堀田弘司著「山への挑戦」岩波書店 1990 (版元寄贈)
7. 西尾寿一著「鈴鹿の山と谷4」ナカニシヤ出版 平成2 (版元寄贈)
8. 沢深著「京都北山を歩く1」ナカニシヤ出版 1990 (版元寄贈)
9. 沢深著「京都北山を歩く2」ナカニシヤ出版 1990 (版元寄贈)
10. 高木勉著「八甲田から還ってきた男」文芸春秋文庫 1990 (版元寄贈)
11. 長谷川昭一著「星はやさしく降る」新潟日報事業社 平成2

(版元寄贈)

12. 加藤則芳著「八ヶ岳の森から」晶文社 1990 (版元寄贈)
13. 国土地理院編「日本の山岳標高(第2次中間報告)」日本地図センター 1990 (国土地理院寄贈)
14. 山村民俗の会編「狩猟」エンタプライズ 1989 (版元寄贈)
15. 山村民俗の会編「柚と木地屋」エンタプライズ 1989 (版元寄贈)
16. 飯野瀬治著「山村と峠道」エンタプライズ 1990 (版元寄贈)
17. 岩崎元郎著「山で困ったときのテクニック」山と溪谷社 1990 (版元寄贈)
18. 中村昌之他著「ザ・ヒマラヤ・トレッキング」山と溪谷社 1990 (版元寄贈)
19. 佐藤武雄著「解題日本名山鑑賞」山と溪谷社 1990 (版元寄贈)
20. 西田高生著「剣・立山連峰」山と溪谷社 1990 (版元寄贈)
21. 山下善一郎著「北アルプスのこなしかた」森林書房 1987 (版元寄贈)
22. 貝塚爽平著「富士山はなぜそこにあるのか」丸善 1990 (版元寄贈)
23. 金剛寺拳著「カナダ・アウトドア・ムック」東京新聞出版局 1990 (版元寄贈)
24. 白旗史朗著「写真紀行 白旗史朗の日本アルプス」新日本出版社 1990 (版元寄贈)

場所 神宮外苑の日本青年会館(案)、委員のリストアップ等を行った。  
 (4) 報告事項  
 ①「オーロラの下で」特別鑑賞券受領の件  
 ②「ムシペール」受領の件  
 藤平副会長を通じて富山の池田模範堂より、虫よけ「ムシペール」二一六〇本の寄贈を受けた。各支部、各委員会を通じて、会員に配布した。  
 ③ 役員・委員名簿印刷の件  
 今年度は、委員の増員、住所の変更等多いので、一九九〇年版として一〇〇部印刷することにした。なお新たに委員になら

れた十七名については会長名で委嘱状を発行することにした。  
 ④ 横名善會員遺品受領の件  
 本会で一括受領し、スイス観光局のアルプス博物館、大町山岳博物館等に寄託保管をお願いすることにする。  
 ⑤ 会報『山』に朝日新聞記事「古い山日記から」転載の件  
 ⑥ 山梨支部集會報告の件(村木)  
 (5) 委員会報告  
 ・高所登山(重廣)  
 来年度の海外登山基金の割当て公募は、プレモンスーンに出かける隊も考慮し、九月に会報を通じて公募し、年末締切で審査することにした。  
 ・学生部・青年部(早坂)  
 第一次パミール登山隊は七月十二日出発した。  
 ・総務(藤井)  
 機械故障のため、長らくご迷惑をかけていたテレフォン・サービスも、機械を更新したので、今夏の情報より使えるようになった。  
 販売グッズについても支部の要望もあり品揃えを行いたい。  
 年次晩餐会の会費につき検討中  
 ・山研(石橋)  
 山研改築の具体案については八月中旬に委員会内部で作業し、九月の理事会ではかりたい。

・資料・フィルム(織田沢)  
 大正昭和初期のフィルムについても、ビデオ化の検討を行いたい。  
 ・医療(関口)  
 登山医学シンポジウムの二日目の午前中のプログラムに「登山に於ける救急処置」の教育講座を計画したので、学生部はじめ本会一般会員の方の参加を希望する。  
 ・財務(西村)  
 海外登山基金の割当てについては、十二月末日締切り、一月中旬に審査というところで検討したい。山研の改築については、資金計画を十分に検討することを希望する。  
 ・自然保護(松本)  
 六月十七日、富士山自然観察山行を実施。九月十五、十六日の全国集會は三島市で開催の予定。



(7月)

- 2日 総務委員会
- 3日 婦人懇談会
- 4日 青年部
- 6日 自然保護事務局会議
- 9日 図書委員会
- 10日 会報編集委員会
- 12日 理事会
- 13日 自然保護講演会・村木副会長
- 17日 資料委員会、書評委員会、山研

委員会

- 18日 海外委員会、三水会
- 20日 科学委員会
- 23日 フィルム委員会
- 24日 自然保護委員会
- 26日 山スキー同好会

7月来室者37名

会員異動 7月

退会

- 吉田 浩平(九四六六)
- 細川 武光(九二三九)
- 北 博正(四五六七)

姓名変更

行重 陽子(一〇一三八) ↓元木陽子

タンポチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

一万円―林田正幹、岡本龍行。五千円―原謙一、岡沢祐吉、山寺義雄、羽賀育子、高橋実万。二千元―遠藤光男  
八月四日現在累計二八三名、累計金額二、七七九、〇〇〇円

募金振込先

銀行 協和銀行市ヶ谷支店 普通預金  
口座番号 三六五四六六

郵便局 東京七―三〇六〇―  
口座名 タンポチエ僧院再建協力会

△ △ △



☎ 234-665  
この電話でもお知らせしています

◎第二回登山用雨衣のシンポジウム(下着、肌着も含めて)

昨年第一回登山用雨衣シンポジウムを行って好評でしたが、今年も第二回目を行います。

昨年の第一回シンポジウムで登山者の側から出された雨衣の現状の問題点に対する洗い直しと、寒冷季において重要な、凍死から登山者を護ることを今回のメインテーマにしています。

日時 平成二・一一・一七(土)午後一時一〇分から五時まで

場所 東京都渋谷区 青山学院大学  
正門を入ったところに会場の案内板があります。

参加費 予稿集と昨年の第一回登山用雨衣シンポジウム報告書を含めて、一〇〇〇円

演題と講師

凍死の恐ろしさ  
元南極観測越冬隊医師 関口令安  
縫製の問題点  
ジャパングアテックス(株)  
齊藤利忠

撥水加工はどこまで進歩したか

酒伊織維工業(株) 新井 雅

衣服のむれの研究から

富山大学 諸岡晴美

事例と重ね着の問題点

武庫川女子大学 安田 武

実用されている雨衣の紹介

陸上自衛隊の場合  
陸上自衛隊需品学校

登山用の場合 今福正幸

日本山岳会 雨宮 節

医療委員会 共催

科学研究委員会 共催

◎西川一三氏出版記念講演の夕べ

日時 十一月十七日(土)午後六時〜八時

場所 盛岡市松尾町一七―九建設会館  
大ホール

かつて、『秘境西域八年の潜行』の著者(支部会友)がロブサン・サンポールの昔にかえって、このたび中公文庫より改訂新版上、中、下三巻にノーカーットの全文を紹介したもので、西域ファン必読のものとして推薦いたします。

主催 日本山岳会岩手支部

申込み先 盛岡市茶畑一―一六

神農歯科気付 電話〇一九六一

五一八二四一

会費 五〇〇〇円(本代こみ) 現金

封筒利用のこと。

申込み締切り 十月三十一日 必着のこと。

共催 岩手民俗の会、盛岡ユネスコ協会、ロブサン・サンボアの会

◎初級岩登り講習会のお知らせ

期日 十月二十日(土)～二十一日(日)

場所 小川山

連絡先 JAC事務局(参加申込者には詳細連絡します)

指導委・集会委共催

訂正 八月号(五四二号)一八頁  
三・五行目 動崎 徹氏とあるのは柴崎 徹氏が正しいので訂正致します。

平成二年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 日 本 山 岳 会

発行人 山 田 二 郎

編集代表 小 倉 厚

電話東京(261)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社 技 報 堂